

《報告書》

第6回 協働を考えるシンポジウム

「緑×協働＝コミュニティ」

～テーマ型コミュニティづくり～

日 時：平成26年10月24日（金）

午後2時～4時30分

場 所：西東京市役所保谷庁舎4階研修室

主 催：西東京市市民協働推進センターゆめこらぼ

目次

1.	プログラム	1
2.	本事業の目的と概要	2
2.1	本事業の目的	2
2.2	開催概要	2
2.3	参加者数	2
3.	基調講演	3
	「緑×協働＝コミュニティ」～テーマ型コミュニティづくり～	
4.	パネルディスカッション	7
4.1	登壇者のご紹介	7
4.2	パネルディスカッション前半(各パネリスト活動紹介)	8
4.3	パネルディスカッション後半(質問シートに対する回答)	10
5.	アンケート結果(抜粋)	14

(別紙) 案内チラシ

1. プログラム

第1部

1. 開会・主催者挨拶（午後2時00分～）

西東京市市民協働推進センター センター長 内田雅俊

2. 基調講演（午後2時05分～）

「緑×協働＝コミュニティ ～テーマ型コミュニティづくり～」

NPO法人 NPO birth 事務局長 佐藤留美氏

第2部

3. パネルディスカッション（午後2時50分～）

コーディネーター

佐藤留美氏 NPO法人 NPO birth

パネリスト

三鷹市の事例紹介 鴨下剛氏（NPO法人花と緑のまち三鷹創造協会 事務局主査）

西東京市の事例紹介 高井謙（みどり環境部みどり公園課 課長）

水井高志氏（NPO法人西東京花の会 事務局次長）

西東京市の事例紹介 若尾健太郎氏（西東京農地保全協議会 事務局長）

西東京市の協働・コミュニティ政策の紹介

古厩忠嗣（生活文化スポーツ部協働コミュニティ課 課長）

休憩（午後3時30分～）

※質問シートの回収

パネルディスカッション再開（午後3時40分～）

質問シートに基づいてQ&A

4. 閉会（午後4時30分）

2. 本事業の目的と概要

2.1 本事業の目的

西東京市市民協働推進センターゆめこらぼでは、協働について市民や関係者の理解と認識を深めるために、「協働を考えるシンポジウム」を年1回開催しています。

過去実施されたテーマは、第1回「市民と共につくる協働に向けて」、第2回「市民とともに、協働のまちづくりを」、第3回「市民の力で協働のまちづくりを」、第4回「協働の未来を語る」、第5回「参加と協働のまちづくり」で、昨年度までの第1回～第5回では、他市から基調講演の講師をお招きし、他市の事例を中心に協働について学ぶ企画でしたが、今回は地元から講師をお招きし、西東京市での協働のまちづくりを考えてみることにしました。

6回目となる今年度のシンポジウムでは、西東京市に事務所のある NPO 法人 NPO birth の事務局長佐藤留美氏に基調講演をお願いし「緑×協働＝コミュニティ ～テーマ型コミュニティづくり～」と題して、“人と自然・人と人・人と社会をつなぐ”事業を展開していくなかで、公園や地元の緑からどのようにコミュニティがつくられているのかを学びました。

西東京市でもコミュニティガーデンづくりが始まっております。そこで、少子高齢化社会を迎え、一人暮らしの高齢者や子育て中の母親、父親の皆さんにとってコミュニティガーデンが身近な居場所となる可能性を探ってみることにしました。

パネルディスカッション前半では、基調講演を基に各パネリストの事例を交えた活動紹介をし、緑を通して広がる協働のイメージや情報を共有し、後半では、会場の質問に回答しながら緑を通じ協働することでのコミュニティ形成や居場所づくりについて意見交換を行いました。

2.2 開催概要

日 時	2014年10月24日（金）14時～16時30分	
会 場	西東京市保谷庁舎4階研修室	
対 象	西東京市市民・市民活動団体、西東京市職員（職員研修）、他市職員	
定 員	50名	

2.3 参加者数

一般参加	25名	行政職員参加(近隣市含む)	31名	合計	56名
------	-----	---------------	-----	----	-----

3. 基調講演

第1部：基調講演

「緑×協働＝コミュニティ ～テーマ型コミュニティづくり～」

佐藤留美氏（NPO 法人 NPO birth 事務局長）



NPO 法人 NPO birth（バース）は西東京市を拠点に活動する NPO 法人。身近な緑を守る活動をしています。

武蔵野は緑豊かで雑木林や畑が残っている地域です。しかし気が付くと、いままでも畑や林だった場所が駐車場やマンションになっている。仕方がないけれど、どんどん緑が少なくなって、生き物が棲める場所が減っている。

この状況を少しでもなんとかできないのかと考えて NPO を立ち上げました。

このあたりの武蔵野の緑は、用水を引き、木を植えて畑をつくり、つまりは人が暮らしのために作ってきた自然です。ある意味「人工的」な自然であるのに、そこには豊かな生態系が生まれている。人間も生態系の一部として存在しうる場所。そのことに感動し、暮らしとともにある緑の景観を残したいと思い活動を続けています。

緑を残すために大切なことは、人と緑の関わりをつくること。

そう考え、NPO birth では、身近な緑を守ろうという市民団体のサポートや環境教育、また自治体や企業と連携して緑地を保全したり、新たなコミュニティづくりのための緑を生み出す事業を行っています。

また武蔵野と狭山丘陵、16 の都立公園の指定管理を造園会社と一緒にしています。

最近では、JR と連携し中央線東小金井駅と武蔵境駅間の高架下でのコミュニティガーデンを作ったり、東京都とセブン-イレブン記念財団と一緒に緑の活動へ助成したり支援する事業も行っています。



私達の活動の最終目標は、この絵のように、地元で愛される地域のみどりが地域の人々の手で守り育まれるまちをつくることです。この絵は、都内にある実際の事例を集めて、パッチワークのように組み合わせ作りしました。ちょっと前までは、自然を守ろうというと、自然が好きな人たちがこれ以上自然を破壊しないでほしいとやってきた活動が多かったと思います。

けれど、これからのみどりづくりは、誰もが自然を暮らしに取り入れて、気軽に楽しんで、その結果、まちに緑が溢れていく。

学校とか商店街、駅前、病院、コミュニティセンターなどまちのいろいろな場所に緑が増えていく。

一人一人がちょっとずつ緑に気持ちを寄せることにより、こんな豊かなまちづくりが実現できるのではないかと考えています。



たとえば、さきほどお話した中央線の高架下。

JR が整備している高架下緑道の一部にベンチや花壇のスペースをつくり、市民とともにガーデンをつくるプロジェクトをはじめました。

ちょっとしたスペースで、ちっちゃなお庭をみんなで作っていくことで、まちの中に緑と人が集えるができていく。こんな場がまちのあちこちにできてきたら・・・ほんとうにすてきなことだと思います。

さて、緑の価値についてこれからお話ししたいと思います。



ひとつめは「環境の保全」。

これは武蔵野地域を流れる野川です。美しい風景ですね。生物多様性という言葉も少しずつ広まっていますが、まさにまちの中の緑地や公園は多様な生き物が棲める場所。

私たちは武蔵野地域の都立公園での自然環境のモニタリング調査を行っており、この3年ほどで200種以上の希少種を確認しています。



次に「コミュニティの再生」の場として。

昔はどの家にも縁側があり、そこで近所の方がおしゃべりをしたり、子どもたちが遊んでいました。縁側は、コミュニティを育む大切な場所だったのでですね。これは三鷹市の公園につくったコミュニティガーデンです。昔の縁側が変わる、現代の縁側、まちの縁側として、こんな場がとても求められています。



次に「健康づくり」の場として。欧米ではもう20年ぐらい前から肥満や心臓病の問題が深刻化し、公園や緑地などのグリーンスペースが注目されました。

身近にグリーンスペースがあることで、どれだけ健康管理に役立つかという研究が進んでいます。

日本でも同じ問題が表面化してきています。いま私たちが管理する公園では、スポーツのミズノと一緒に、年間100回以上の健康やスポーツに関する教室を開いており、とても好評を得ています。

「森林浴」という言葉もありますが、健康やレクリエーションという方面からも緑の価値が上がってきています。



そして「教育・あそび」の場としての緑。子どもたちが自然の中で遊ぶという体験、命と直接関わる機会がとても少なくなっています。そこで私たちは、0歳児からの自然教室を行っています。

この教室に参加した子どもの中で、5歳になってはじめて虫を捕まえた子がいます。その子は最初は虫を捕まえるとつぶしてしまい、でも死んだとわからずに虫かごに入れていたんですね。

虫に命があるということがわからなかったんです。

その子も最後には、ほかの子どもと同じように、そっと虫を持てるようになりました。この写真は、みんなで見つかるというプログラム。自然は「みんな違って、みんないい」ことを実感として教えてくれる。子どもの成長のためには、身近に自然があることがいかに大切なことかと思えます。

また以前は、林を残してもお金にならない・・・と言われていましたが、いまは緑があることで「経済的な効果」が見込まれる時代となりました。

緑地があるから不動産価値があがるという時代になってきたのです。



たとえばこの写真。ニューヨークのセントラルパークが広がっています。これは建設中のマンションに掲げられた看板です。ここに住めばこの景色がいつでも見れますよ、ということなんですね。

もう 15 年ぐらい前にニューヨークで撮影した写真ですが、いま日本でも、マンションのチラシを見ると公園などの緑がそばにあることが「ウリ」になっている。そんな時代になってきています。



また、公園は「文化芸術」の場としても注目されています。まちの中のオープンスペースが、アート場として活用されるようになってきているんですね。

私たちが管理する府中の森公園では、隣接する美術館と連携して、ワークショップやアートイベントを開催しています。公園があることで新たな文化活動が生まれ、地域の文化レベルを引き上げていく。

そんな可能性も見えてきています。

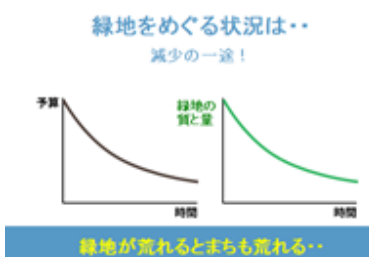


緑の価値は、まだまだあると思います。

そしてこれらの価値が上がることによって、まちとしての魅力もアップしてくる。これはニューヨークはじめ海外の先進都市の取り組みを見ても明らかです。

しかし一方で、現在緑を巡る現状は非常に厳しい状態にあります。行政においても、緑にかける予算が減っている。緑地の質も量も減少傾向にあります。

また東京の緑のほとんどは、農地など民有地ですから、守るのが非常に難しい状況でもあります。



ニューヨークも 70 年代に、緑にかける予算がばつさりと切られました。有名なのはセントラルパーク。

昼間でも女性が一人で歩けなかった。このままではいけないという市民が立ち上がり、公園の整備を自らがはじめ、それに対して支援の輪が広がりました。

緑がまちを豊かにするという意識が次第に高まり、その結果、現在のニューヨークは、驚くほど安心なまちになっています。

まちの各所にすてきなコンテナガーデンがあり、公園では楽しいイベントが開催され、花と緑いっぱいの中で思い思いに楽しむ人々の姿を見ることができます。

今までは緑は誰かが持っているもの、誰かがやってくれるもの、誰かが整備してくれて、誰かが守って管理してくれて自分は使うだけという関係だった。これからは、作るのも、守るのも、そこを活かすのも、市民と一緒に進めていこう、そういう時代になってきたのだと思います。

ここで、緑×協働＝コミュニティ、つまり緑がコミュニティづくりに大きく貢献した事例として、三鷹市のコミュニティガーデンの例をご紹介します。

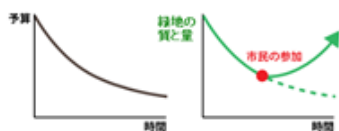
コミュニティガーデンは、地域の庭やみんなの庭という意味です。

もう6年ほど前になります。三鷹市からコミュニティガーデンを作りたいとの相談を受けました。

閑静な住宅街の中に小さな公園（児童遊園）がある。住民は高齢化して公園はほとんど使われなくなり、老朽化してしまった。

改修を考えているが、その後の維持管理に市民が参加する仕組みができないかという相談です。

市民協働が解決のカギに！



緑地がよくなると、まちが元気になる！

一方、住民もこの古い公園をなんとかできないかと思っているという状態でした。そこで私たちは三鷹市と住民と一緒にコミュニティガーデンを作り、その後の管理も協働で進めていけるよう、中間支援という立場でサポートをすることになりました。

市は工事やワークショップの費用、私たちはワークショップの企画運営、住民にはアイデアと労力を提供してもらった構図を作りました。またこの事業には、園芸関係の専門知識を持つNPO法人 Green Works にも関わってもらうことになり、さまざまな団体や個人と一緒にやる事業となりました。

この事業を行うにあたり、私たちはステップ1（みんなで考える）→ステップ2（みんなで作る）→ステップ3（みんなが楽しめる）という、3つの段階を設定しました。

“みんな”をキーワードとした3つのステップを進めることにより、仲間づくりが進み、結果としてコミュニティを生み出す仕組みです。

まず最初のステップ「みんなで考える」では、住民のみなさんが思い描く「地域の庭」の夢をシェアすることからはじめました。最初は堅い雰囲気だった会でしたが、夢を語り始めたら沢山の意見がでてきて、みなさんの顔が明るくなってきました。次に現地の状況を確認に行きます。

住民のみなさんだからこそ知っていること、どこが日がよく当たるか、風通しはどうか、ふだんはどんな人が使っているか・・・。

一方的に改修するのではなく、住民の持つ情報を共有していきます。

そのうえで、みなさんと一緒に公園のテーマとなる名前を話し合い、「すぽっとガーデン」という名前に決まりました。

「すぽっと足を踏み入れたくなるような」「すぽっとライトが当たるような」・・・といったイメージです。テーマが決まれば次はお庭のデザインです。

市民から出されたイメージと提案を専門知識のあるスタッフがスケッチをしながら形にしていきます。

だんだんイメージが固まってくると、みなさん、ほんとうにこんな庭ができるのかしら？と思いつつ、ワクワク感が増しているのがわかりました。

次にコミュニティガーデンに関わる人手や予算を踏まえたうえでの植栽プランを考えます。

ローコスト、ローメンテナンス、そしてエンジョイ！楽しむこと。

これらを基本として、みなさんの意見を聞きながら植物を決定していきます。「実のなる木が欲しいな」「香りがするお花を」「鳥やチョウチョが来るといいな」そのほか「伐採する木はベンチにできないかな」「看板もほしいね」などなど。

そして次の「みんなで作る」ステップでは、実際に植栽をしたり壁にペンキを塗ったりと、協力しあって作業を進めます。そしてみんなが思い描いたとおりのガーデンができあがりました！

実はコミュニティガーデンは、出来上がったときからが新たなスタートです。

3つ目のステップ「みんなが楽しめる」では、住んでいる人も通りがかりの人も楽しめる場にするため、お手入れの方法や、ガーデンにある植物でリースなどのクラフトづくりやハーブティなど、さまざまな楽しみ方を学びます。



こうして、いまこの「すぽっとガーデン」は改修後5年が経ち、植えた植物は大きく見事に育ちました。毎月1度のお手入れ日には、ご近所さんが集まって花がらを摘んだり、お茶を飲んでおしゃべりをしています。

誰も使わなかった寂しい場所が、みんなが集い楽しむ場として生まれ変わる。

コミュニティガーデンにはたくさんの可能性があると感じています。ご清聴ありがとうございました。

4. パネルディスカッション

4.1 登壇者のご紹介

【コーディネーター】

佐藤留美氏（NPO 法人 NPO birth 事務局長）



自然と人との共存できるまちづくりを目指し、1997年に緑の中間支援組織 NPO birth を設立。事務所を西東京市におく。レンジャー、コーディネーター、コミュニティデザイナーの各役職を置き、自然と人、まちをつなぐ活動をすすめている。武蔵野地域を中心に、16の都立公園の指定管理も行っている。「東京の緑を守る将来会議」代表、環境再生医上級。著書に『みどりの市民参加ー森と社会の未来をひらく』（日本林業調査会・共著）等。

【パネリスト】

鴨下剛氏（NPO 法人花と緑のまち三鷹創造協会 事務局主査）



緑や自然を将来にわたって維持し、創出していこう、そして市内を緑と花でいっぱいにと考え、市民・事業者・三鷹市が協働して成し遂げるようネットワークづくりなどをコーディネートするために設立され活動している。

若尾健太郎氏（西東京農地保全協議会 事務局長）



都市農業シンポジウム「都市における『農』の未来 in 西東京」～地域・暮らし・市民に身近な「農」～などを開催。都市農業をもっと身近に感じてもらうための活動をしている。

水井高志氏（NPO 法人西東京花の会 事務局次長）



市民が自分たちで植える花を育苗して、その花を植栽・管理する市民参加の花壇づくりをし、行政は種苗、資材類の現物支援をするという運動の基本と協働のシステムを構築。花と緑をテーマに「花いっぱい運動」を展開している。

高井謙（西東京市みどり環境部みどり公園課 課長）



公園緑地の整備・維持管理を行いながら、生垣助成制度やみどりの散策路めぐりなど、緑化の推進・啓発活動を行い、公園の維持管理において市民と協働を積極的に推進しています。

古厩忠嗣（西東京市生活文化スポーツ部協働コミュニティ課 課長）



西東京市では、市民がまちを支え、自分たちのまちを創っていくという市民主体のまちづくりを推進しており、市民自らによるまちづくり活動への支援や、市民活動団体・企業・大学・行政などが協働する仕組みづくりなどを進めています。

4.2 パネルディスカッション前半

【各パネリスト活動紹介】（発表順に記載）

鴨下剛氏（NPO 法人花と緑のまち三鷹創造協会 事務局主査）

三鷹市は、昭和 40 年代後半にコミュニティ行政の提唱をし、約 40 年にわたって市民参加と協働というまちづくりを進めてきました。当協会は、花と緑に関わる協働を推進することを目的にして平成 21 年 4 月に設立し、同年 8 月に NPO 法人格を取得しました。同年 11 月には、三鷹市とパートナーシップ協定を締結して事業を進めています。

協会の七つの機能のうち緑の保全や緑化推進に関わる機能とそれに関わる人材育成は大きなウェイトを占めています。ボランティアには、養成講座を通して、花壇と緑という二つのボランティア活動をしてもらっており、それぞれの部会では活動に関わる講座や研修会の内容を企画し、ボランティア同士の交流の場にもなっています。

私どもの事業は、緑に関わるきっかけとしてのステップ 1、興味を持ちもっと知識を得たい・活動したいという段階のステップ 2、実際にボランティアとして活動するステップ 3 があります。

ステップ 1 では、誰でも気軽に緑に触れ合えるイベントや植物観察会などを開催しています。

ステップ 2、勉強してみる・もっと参加してみるということで、緑への興味をより深めるための講座や講習会を開催します。ステップ 3 は、ボランティアになって活動する。講座の修了生を中心に市内の緑地の維持管理や公共施設の花壇、コミュニティガーデンでボランティアとして活動してもらっています。

三鷹では、このような形で協働による事業を進めており、想いを形にするプロセスを共有することが継続して進めるうえでは大切なことだと感じています。誰でも参加できる気軽さと同時に、緑を支える人材育成を進めながら今後も三鷹の花と緑のまちづくりを進めていきたいと思えます。

高井譲（西東京市みどり環境部みどり公園課 課長）

業務内容は公園緑地整備・維持管理、緑化の推進を行っており、243 ケ所 248,850 m²の公園を維持管理しています。みどり公園課としては市民との協働が大きな柱と考え、895 名の公園ボランティアと協働で 66 ケ所の公園を維持管理しています。

「人にやさしいまちづくり条例」による開発に伴って緑が失われていくなかで、平均面積 50 m²未満の小規模緑地の提供が 35 ケ所あり、その有効活用が大きな課題となっています。そこで、今年からコミュニティガーデン事業を推進しようとチャレンジしています。

コミュニティガーデン事業の推進は、ほとんど予算が無く、市民主体となって自主的に自由に活動してもらい、地域のコミュニティに役立てられないか、ガーデニングの技術を学びあい、緑の大切さを理解してもらえないか、いこいの空間をつくる助けにならないかと考えています。

モデルケースとして、下保谷の小規模緑地を最初のコミュニティガーデンと位置づけ地域の方々、NPO 法人西東京花の会、さらには地域のコンビニの協力を得る形で始めました。地域の理解を得ながら順調に維持管理を続けています。また、自由な発想で考えてもらえるよう学生ボランティアとの連携も模索しています。

水井高志氏（NPO 法人西東京花の会 事務局次長）

花の会は、みどり公園課と完全な協働で、ボランティア活動をしている団体です。

歴史は、設立が平成 9 年で、平成 13 年に田無市と保谷市が合併して西東京花の会という名前になりました。平成 15 年に育苗センターが整備され、平成 16 年 NPO 法人として認証されました。平成 20 年に

オープンガーデン事業を開始し、平成 22 年には、全国の花のまちコンクールで入選して表彰されました。

花の会の概要は、会員数は 130 人前後であり、育苗センターでは 2 万株ほど花苗を作り、市内 38 か所の公園花壇を管理しています。また、家庭の庭 27 か所もオープンガーデンとして市と一緒に管理しています。

みどり公園課との協働事業では、育苗センターの維持管理、公園花壇の維持管理、ガーデナー養成講座などがあります。

市民との協働作業では、幼稚園や小学校などとの実習、公民館事業として植栽の実習と寄せ植え、講習としてはバラ栽培実践教室、コミュニティガーデナー養成講座、寄せ植え教室、腐葉土教室等を実施しています。イベントも市民まつり、アースデイ、NPO 市民フェスティバルに参加し、公民館や消費者センター事業への協力もしています。

今後も西東京の基本理念、花いっぱい運動をみどり公園課と協働で推進しようということです。コミュニケーションを大切に活動してきたが、今後も続けていきたいと思います。

課題的には、最近、温暖化だとか大雨だとか特別な気候変化によって花の管理が大変になり、技術的に大きな悩みがあります。また、40 か所近い公園花壇を維持するのは大変なことで、無償ボランティアの増員ということが我々の課題ではないかと思っています。

若尾 健太郎氏（西東京農地保全協議会 事務局長）

活動のきっかけは、西東京出身であり農地や緑の多い西東京が原風景にあるが、東京を出て働いた後、地元に戻ってきたら、緑が少なくなっているのに危機感を感じたことでした。

昨年 8 月農水省の「農ある暮らしづくり交付金」事業の枠組みの中で、まちづくりの会社、高齢者サービス、地域振興の社団法人、農家の構成で任意団体を立ち上げました。

活動の内容は障がい者、高齢者、一般市民、子どもたちと農地法に則り農園利用法式でレクリエーション目的に農作業全般のお手伝いをする事や都市農業を守るにはどうしたらいいのかという勉強会をしています。

目指しているのは都市農業を振興させること。そのために農家が儲かるようにし、相続税が発生した時、ちゃんと払える仕組みを作れば、農地が守られる。そのモデルを提供できればと考えています。

農を通じていろいろな方が参加することにより、自分たちで成り立つような仕組みが作れるのではと考えています。目的を同じくする団体と意見交換しながら、農家にとっては社会貢献しているという自負が生まれ、高齢者の方は土や緑に触れる機会ができ健康増進につながり、笑顔になるつながる仕組みを全国に進めていけたらと思っています。

ゆめこらぼの円卓会議に参加する中で、今年からは障がい者の居場所づくり、就労支援もテーマに、様々な方に参加してもらっています。障がい者は集中力があり、農家にとって大変な種まきを効率良く行い喜ばれているし、様々な人が協働することで分け隔てないコミュニティができあがってきていると感じています。今後は障がい者の就労が可能になるような場を提供できればと思っています。

農家・福祉事業者・高齢者・障がい者・児童の協働の結び役として行政の協力・農家の協力を得ることや今後の体制をどうするか、ビジネスモデルをつくるのが次の課題です。

古厩忠嗣（西東京市生活文化スポーツ部協働コミュニティ課 課長）

西東京市は平成 20 年 2 月市民協働の基本方針を策定し、平成 21 年 3 月に市民協働推進センターゆめこらぼを立ち上げ、市民団体との協働を推進しています。登録団体も 119 団体に達しました。

平成 21 年度にひまわりプロジェクト（東京大学・ひまわりプロジェクト・市の協働）を立ち上げ、種

まきから収穫、油絞りまでを行っています。また NPO 等企画提案事業では NPO や市民活動団体等との協働事業を実施するための補助制度を行っています。

平成 25 年 3 月に地域コミュニティ基本方針を策定し、様々な地域主体による課題解決の場となることを目指しています。

参加者が協力することでメンバーのコミュニティの場の役割を果たしています。今日のテーマである緑ということでは協働のまちづくりにもつながっていると考えています。地域安全や環境などにもつながっていく、様々な視点から協働を考え、参画しやすく、継続性のあるようにするために皆さんからヒントを頂きたい。



4.3 パネルディスカッション後半

【質問シートに対する回答】

佐藤氏：(質問シート) ボランティアの募集・人材育成・継続的な活動を行ううえで、重要な事や気を付けていることはなんですか。

水井氏：大変悩み多い課題である。コミュニティガーデナー養成講座の継続的開催。ボランティア活動をするためという前提で募集しているので受講生の定着率が非常に高い。また、入会の問合せがあれば即、その方に会いに行きます。そして、一番大切なのは活動が楽しいことです。会費を払ってもらいボランティアに参加してもらうのですから、参加者を笑わせること、楽しんでもらうことは絶対の条件です。

高井：ボランティアの創造性が一番大切なので、行政がどう受け止め対応できるかという姿勢で臨んでいる。対応できないことも多々あるが、やれることは誠意をもって行い、一緒になって汗をかき、悩んだりしながら歩いていくことです。

鴨下氏：人材育成ではボランティア講座など知識をレベルアップする講座を開催しています。ボランティアの募集は、会員だけを増やすのではなく、会員ではないボランティアもどんどん増やしていくことを考えています。地域の方が多く、大きな三鷹市の中の緑というよりは、小さな自分たちのみんなの庭ということで、楽しみを求めて参加される方もいるので、専門的な知識が無くても受け入れられるよう、ボランティアのみなさんをお願いしています。

継続のためという意味においては、それぞれの活動グループの自立ということが大きいと思います。色々な意味で組織として自立できるようになると、新しいことや協働でも違う形が出来るよ

うになるのではないかと考えています。上手に支えながら団体に自立してもらうことがこれからの課題です。

佐藤氏：公園でも年間のべ数万人ものボランティアが活動しています。ボランティア登録というと、ちょっとハードルが高いですね。そこで初心者の方も気軽に参加できる「ちょこっとボランティア」など体験的なプログラムを作ることで、興味ある方が参加しやすい仕組みをつくっています。

佐藤氏：(質問シート) なぜ協働が必要なのか。ボランティアをする目的・ビジョンがないとただ集まるだけになってしまい、なかなか力がついていかないのではないかと。また、三鷹市ではどのような緑環境づくりを市として目指しているのか。

鴨下氏：三鷹市は緑と水の公園都市というビジョンを掲げています。三鷹市内に流れる3本の河川ルートと緑地や公園が一緒にある場所に、3つのふれあいの里を整備しボランティア活動を通じて盛り上げています。

一方、NPO でやっているコミュニティガーデンや花壇づくりでは、市としての大規模な緑地の管理だけではなく小規模の緑地をどう増やしていき、維持していくことが一つの目標となっております。NPO でなければできないという事を任されています。

佐藤氏：(質問シート) 西東京市は自治会との協働があまり活発ではないことについて伺いたい。自治会の活性化を視野にいれ緑×協働=コミュニティを考えていくことはできるでしょうか。また、実践したいと思いませんか。

古厩氏：西東京市の自治会・町内会は200程度あるが、自治会への加入率は2割程度です。まず、そこを活性化したい。自治会町内会の活動に対して支援制度を準備しています。ゆめこらぼを通じてNPO 団体とのマッチングをできる部分は多分にあると感じています。みどり公園課などで実現していることを取り入れていきたい。

佐藤氏：(質問シート) 三鷹のコミュニティガーデンの中で、かもんガーデンは自治会が関わっていると思うがいかがですか。

鴨下氏：かもんガーデンなどのコミュニティガーデンを作るときは、周辺に自治会がある場合は挨拶に行きます。実際に参加をしていただきたいし、組織化していればその後の継続がしやすい。きっかけは自治会であってもその後は個人として関わってもらうことが望ましいです。その場所に自治会なり組織があるのは大きなメリットだと考えています。

佐藤氏：(質問シート) 西東京農地保全協議会の活動について知りたい。参加する方法は？また福祉施設や障がい者施設との関わり方や東大農場との関わり方はどう考えますか。若尾さんのような若い力に期待します。若い力でコーディネートして頂けないでしょうか。

若尾氏：福祉施設・障がい者団体との連携の取り方は、協議会の構成員である高齢者デイサービス事業者が福祉分野の方々に向けて、農福連携の活動を宣伝してもらっています。私達の活動に対しての

理念を了解してもらったうえで参加してもらうことが大切だと考えています。ただ、単に農業が出来るとかではなく、子どもなら食育ができる、高齢者なら元気になるとかそのうえで農家さんの収入の足しになることを理解してもらったうえで、連携を取りたい。これからどうやって連携の輪を広げていくか私自身の課題にもなっています。今後は発信方法を工夫する必要があると思います。

若い頃から東大農場を守っていきたいと思っているが、東大農場は日々変わっていき複雑になっています。一番大切なのは新しいコミュニティを作る夢を共有できる人たちを集めて、それをつないでいくことが大切だと考えています。農福連携の活動に興味のある方は直接私にお声掛け下さい。都市農業の今後を考えるためシンポジウムも開いていきます。

佐藤氏：同じ思いを持つ方々が出会う場があることが、とても大切なことと思います。今日のこのシンポジウムも、そんな場のひとつですね！

佐藤氏：(質問シート) 農地など都市の緑を守るための方法がありますか。

若尾氏：活動を通して農地がいろいろな法律の上で成り立っていることが分かってきました。西東京市は市街化地域でこれから開発を進める地域になっています。農地を守る上で相続税や固定資産税など問題が大きいが、その現状を市民も知ること、理解を深めることが政策提言までつながっていくのではないかと思います。

佐藤氏：(質問シート) 都市の緑をまもるための法律の見直しなど、何か策はないですか。

高井：行政もみどり公園課で、公園の整備をしたり、用地を確保したり緑の保全に取り組んでいる。保存樹林、民地と市道の上に新たな生垣を作る時など、補助金制度を設けているが、もっと大切なことは何かといつも考えています。行政は予算をかけて整備をしていきます。その中で大切なことは市民の緑を大切にすることだと考えています。近くの緑に対する理解が少ない。遠くの緑は大切だけど、隣の緑は何となくしてくれというのでは困ります。ちょっと我慢しても緑を守ることは大事な事だという心が大切だと考えます。

佐藤氏：市民もいま緑がどんな状況にあるのか、その実態を知ることが大切だと思います。

佐藤氏：今日のテーマは緑×協働という掛け算の話でした。

それぞれの現場の活動の中で掛け算の相乗効果を感じていることがありましたらひとつずつお願いします。

水井氏：オープンガーデンは家庭の庭です。個人でやりたい人、自分の庭をみてもらいたい人をバックアップしながら 27 件の家庭の庭を綺麗にしています。どんな方法を取ろうが緑に関心のある人が集まっているという意味で輪を広げていく事が大切なことではないかと思います。

鴨下氏：緑を守る活動をしているなかで、公共施設を作った際に緑が必須になってきています。以前なら業者が入っていたが、行政からボランティアを入れてやって欲しいとか、大学からも共催のような形で連携したいなど、こちらが仕掛けるのではなく、認知され頼りにされる存在になったとい

うことが相乗効果と感じています。

若尾氏：障がい者、高齢者、児童、市民が関わることで運動の場ができる。生きがいの場ができる。食育の場ができる。事業所に野菜を届け使ってもらうことにより、農家の収入につながる。いろいろな人が係わることによりダイバーシティに近づいています。Win×Winの関係だけでなく、Win×Win×Win×Winの関係になってきていると感じています。

高井：ボランティア＝市民との協働と考えています。創造性を発揮してもらい、意見を頂いています。協働ボランティア＝相乗効果のかたまりと考えています。市民の率直な意見をもらい、創造性を活かす姿勢で取り組むことが必要と考えています。

古厩：協働とかコミュニティを進めていくうえで思うことは、一人でも多くの市民の方と顔の見えるコミュニケーションをとる事です。職歴を重ねるなかで別の方法で話をつなげる機会があることもあります。お付き合いを継続して行く事が、協働からコミュニティにつなげていくことと同じではないかと考えています。

佐藤氏：「緑×協働」という掛け算がいくつも重なっていくことで、より大きな輪が広がっていく。そんな可能性が感じられたお話だったと思います。今回の話がヒントになり、今日ご参加のみなさんも、協働の輪を広げつなげていただければと思います。本日はありがとうございました。

5. アンケート結果（抜粋）

《基調講演について》

- ・三鷹市の事例は具体的で理解できました。
- ・三鷹市のすぼっとガーデンなど事例に基づいた話が大変勉強になった。特に事業を進める上で3つのステップに分けている点が参考になった。

《パネルディスカッションについて》

- ・「ボランティアの募集や人材育成継続性のためには、参加者を楽ませること」という言葉がまさにその通りだと感じた。
- ・質問を集めていただいたことで、今実際に聞いてみたいと思っていたボランティアの育成や募集についてのお話を聞くことができた。
- ・様々な組織の方から各々の事例を紹介いただくことにより、仕上げ～仕上がりまでの図が想像しやすかった。
- ・工夫や課題についても、今後、自身の市に持ち帰って参考にさせていただきたい。
- ・清瀬も同じようなボランティア団体や自治会についての悩みがあったので、パネリストの話がとても参考になった。

《全体を通してのご意見・ご感想》

- ・普段協働についての仕事をしてはいますが、公園や緑をもとにした協働について、あまり知らなかったので、大変勉強になりました。
- ・清瀬でもボランティア団体の存続が高齢化に伴い危ぶまれている。今回のシンポジウムで新しい人材の発掘について非常に参考となったのが良かった。自治会の組織維持についても、清瀬市は低いので西東京市のような他の部署とのマッチングの道も考えていきたい。